

筑波大学開学25周年記念
教育学系・附属図書館共催特別展

近代教育学の源流

～コメニウスからフレーベルまで～



1998年9月7日（月）～10月16日（金）開催

筑波大学附属図書館貴重書展示室



ご 挨拶

このたび筑波大学附属図書館では、開学 25 周年を記念し、教育学系との共催により特別展「近代教育学の源流～コメニウスからフレーベルまで～」を開催いたします。

筑波大学は昭和 48 年（1973 年）の創立以来、数々の新しい学問分野を切り開き、先端的な研究成果を挙げてきたと自負しております。一方、わが国初の師範学校として発足して以来 120 年以上にも及ぶ伝統を受け継ぎ、特に教育学の分野では、多くの教育者・研究者を生み出してきました。

今回の展示では 18 世紀ドイツ啓蒙教育思想を中心に、17 世紀のコメニウスから 18 世紀のルソー、ペスタロッチ、19 世紀のフレーベルまで、附属図書館所蔵の原典約 50 点、パネル約 60 点により、3 世紀に渡る教育思想の流れをたどります。

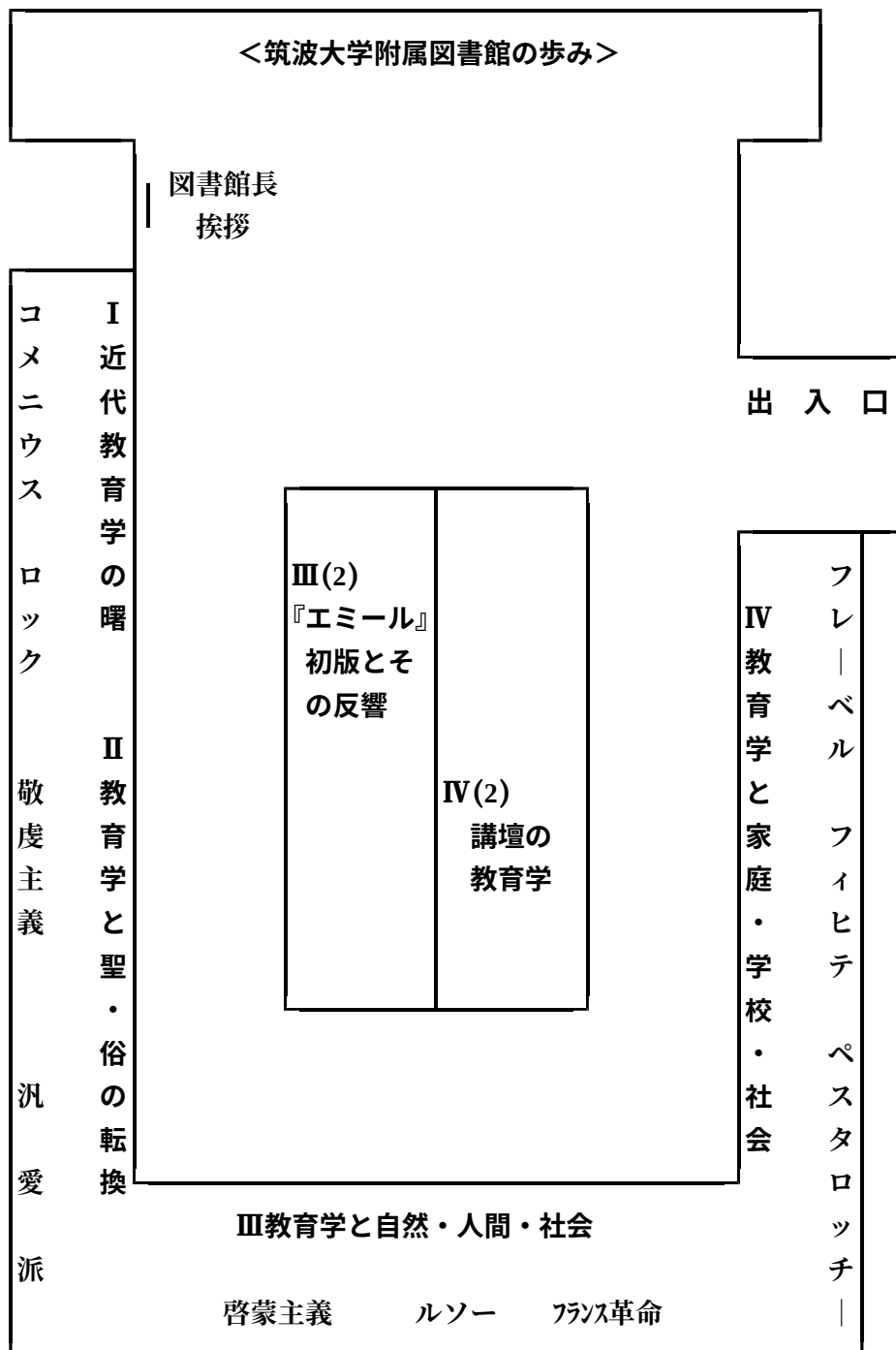
21 世紀を目前に、教育を見直す必要の叫ばれている今日、原点に戻る必要もあるかと考えます。本学所蔵の教育学の古典を広くご覧いただき、教育学の源流に触れていただければ幸いです。

平成 10 年 9 月 7 日

筑波大学附属図書館長

斎 藤 武 生

<展示会場案内>



I. 近代教育学の曙 ～コメニウスとロック～

近代教育学の源流は、コメニウス（1592-1670）＜表紙左上＞に求められます。コメニウスは、主著『大教授学』で、悲惨な戦乱の世を、神による人間への試練として受けとめ、有識と有徳そして敬神の精神で充たされた人間性の回復によって、人類再生の期待を教育に込めます。そのさい、神が創造した自然は、完全に合理的なものとして認識されました。そして、直観と言語を通した合理的で組織的な人間形成の方法を、教授方法や学校のシステムとして確立することができる、とコメニウスは考えていたのです。彼が創案した『世界図絵』＜頁右＞は最初の絵入り教科書として、また『言語入門』は言語学習の模範的教科書として、後世に大きな影響を与えました。



『世界図絵』第97章「学校」

[出展文献]

- コメニウス『大教授学』 1657年（1957年）
Johan Amos Comenius, *Didactica magna*, 1657, Rep., in:
Opera didactica omnia, in aedibus Academiae
Scientiarum Bohemoslovenicae, 1957.
- コメニウス『世界図絵』 1746-54年
Johann Amos Comenius, *Orbis sensualium picti pars prima
et secunda*, 1746-54.
- コメニウス『言語入門』第2版 1665年
Johann Amos Comenius, *Janua linguarum reserata*, 2.ed., 1665.
- コメニウス『人事改善総勧告』 1666年
Johann Amos Comenius, *De rerum humanarum emendatione
consultatio catholica*, Editio 1, 1/T1-2, 1966.



『教授学全集』の巻頭を飾る
コメニウス像

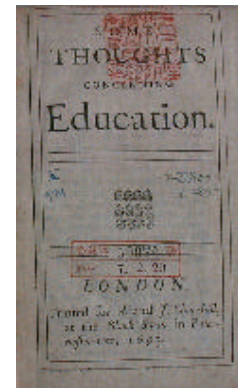
コメニウスより 40 年あとにイギリスに生まれたロック（1632-1704）＜頁左下＞は、その合理主義を教育のうえで展開させようとしていました。そこでは、健全な身体を基礎として、理性の力を頼りに、賢明な市民精神の形成が期待されていました。しかし、その合理主義にはかぎりない不安が媒介されていました。『教育論』初版＜頁右下＞の徳育論や宗教教育論が第3版以降では強化・拡充されたという事実は、その意味で重要です。



ロック



上流階級の家庭の光景



『教育論』初版

[出展文献]

ロック『教育論』初版 1693 年

John Locke, *Some thoughts concerning education*, 1.ed., 1693.

ロック『教育論』第3版 1695 年

John Locke, *Some thoughts concerning education*, 3.ed., 1695.

Ⅱ. 教育学と聖・俗の転換 ～敬虔主義と汎愛派～

ドイツの敬虔主義（ピエティズム）は、儀式化しつつあった正統ルター派に対して、日常的な共同生活のなかにキリスト者にふさわしい敬神と賢明さを求め、教育の思想と実践に特異な足跡を残しています。その代表的な人物はフランケ（1663-1727）〈頁右〉ですが、彼はプロイセン・ドイツが 17 世紀の末に学芸の拠点に定めたハレに赴任し、ハレ大学教授としての職務のかたわら、フランケ学院〈右下図〉とよばれる学校結合体を創立し、その経営に生涯を捧げました。



フランケ



プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルムによる民衆学校の視学。王はフランケ学院のパトロンでもあった。



完成時のフランケ学院

[出展文献]

フランケ『愛に満ち誠実な神の足跡』 1709 年

August Hermann Francke, *Segens-volle Fußstapfen des noch lebenden und waltenden liebevollen und getreuen Gottes, zur Beschamung des Unglaubens und Starckung des Glaubens, entdeckt durch eine wahrhafte und umstandliche Nachricht von dem Waysen-Hause und ubrigen Anstalten zu Glaucha vor Halle: Welche im Jahr 1701. zum Druck befördert, ietzo aber zum dritten mal editet, und bis auf gegenwertiges Fahr fortgesetzt*, 1709.

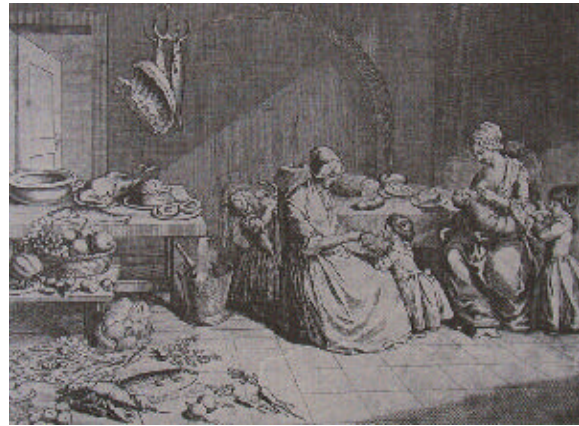
フランケ『ハレの孤児院（Waisenhaus）食卓規則』 1729 年

August Hermann Francke, *Der von Gott in dem Waysenhouse zu Glaucha an Halle ietzo bey nahe für 600. Personen zubereitete Tisch, nach seinem Anfang, Fortgang, gegenwertigem Zustand und eingeführter Tisch-Ordnung, kürzlich beschrieben, mit angehängten Zwey Erweckungs-Reden, deren die erste Anno 1699 bey Einweihung des damaligen kleinern Speise-Saals, die andere Anno 1711 bey Einweihung des grossen Saals gehalten worden*, 1729.

ドイツ啓蒙主義の教育は、バゼドウ（1724-90）＜頁上段左＞の「汎愛学舎」にかかわりをもった汎愛派とよばれる教育家たちによって担われました。彼らは幸福な生活と公共の福祉との両立を理想として広範な著述活動を展開しますが、ことに教育方法の改善においては「遊戯」の巧みな利用などが注目されます。ハレ大学でドイツ最初の教育学教授となったトラップ（1745-1818）、ザルツマン（1744-1811）＜頁中段左＞、最近の研究で注目されているカンペ（1746-1818）＜頁下段左＞やバルト（1741-92）などが、その系譜に属しています。



バゼドウ



『基礎教科書』に描かれた母子と食事、食物の図。



ザルツマン



ザルツマンのシュネッペンタールの学校



カンペ



カンペ編『教育総点検』

[出展文献]

ズルツァー『教育・教授試論』 1748 年

Johann Georg Sulzer, *Versuch von der Erziehung und Unterweisung der Kinder*, 1748.

フェルビガー『教育小論集』 1769 年

J. I. v. Felbiger, *Kleine Schulschriften*, 1769.

ベルトホルト編『フリードリヒ大王全集』 1914 年

G. Berthold (Hrsg.), *Die Werke Friedrichs des Großen*, Zehn Bände, 1913-4.

バゼドウ『方法書』初版 1771 年

Johann Bernhard Basedow, *Das Methodenbuch für Väter und Mütter der Familien und Völker*, 1. Aufl., 1771.

バゼドウ『デッサウ汎愛学舎』 1774 年

Johann Bernhard Basedow, *Das in Dessau errichtete Philanthropinum*, 1774.

バゼドウ『基礎教科書の紹介』 1774 年

Johann Bernhard Basedow, *Vorstellung wegen des nun vollendeten Elementarwerks an mancherley Leser*, 1774.

バゼドウ・カンペ編『教育的交渉』 1778 年

J. B. Basedow / J. H. Campe (Hrsg.), *Pädagogische Unterhandlungen*, 4 Hefte in 1 Bd., 1778.

バゼドウ『デッサウ寄宿学校の規則』 1785 年

Johann Bernhard Basedow, *Nachricht von der gegenwärtigen Verfassung des Erziehungs-Instituts zu Dessau*, 1785.

カンペ編『教育総点検』全 16 巻 1785-92 年

Joachim Heinrich Campe (Hrsg.), *Allgemeine Revision des gesamten Schul- und Erziehungswesens von einer Gesellschaft praktischer Erzieher*, 16 Theile, 1785-92.

カンペ『わが娘への父の忠告』初版 1791 年

Joachim Heinrich Campe, *Väterliche Rath für meine Tochter*, 1. Aufl., 1791.

ザルツマン『シュネッペンタール子ども通信』 1787 年

Christian Gotthilf Salzmann, *Nachrichten für Kinder aus Schnepfenthal*, 1787.

ザルツマン『宗教教授法』初版 1787 年

Christian Gotthilf Salzmann, *Über die wirksamsten Mittel Kindern Religion bezubringen*, 1. Aufl., 1787.

ザルツマン『蟻の本』初版 1806 年

Christian Gotthilf Salzmann, *Ameisenbüchlein, oder Anweisung zu einer vernünftigen Erziehung der Erzieher*, 1. Aufl., 1806.

パールト『マルシュリンツ学校計画』 1776 年

Karl Friedrich Bahrdt, *Philanthropinischer Erziehungsplan oder vollständige Nachricht von dem ersten wirklichen Philanthropin zu Marschlins*, 1776.

シュミット『最新教育文献総合叢書』 1798-1803 年

J. E. C. Schmit, *Allgemeine Bibliothek der neuesten und pädagogischen Literatur*, 1798-1803.

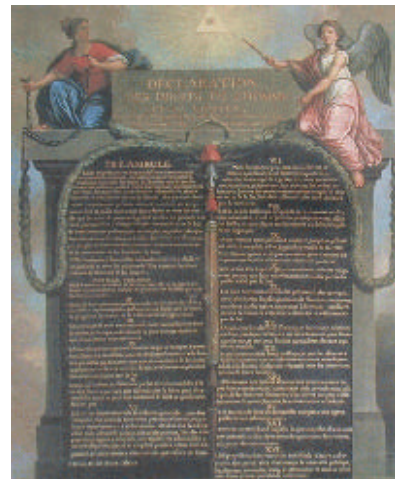
Ⅲ. 教育学と自然・人間・社会 ～啓蒙主義・ルソー・フランス革命～

18 世紀フランスを華やかに彩る思想家群は、ロックを受け継ぎ、自然を克服する人間の完成可能性と人類の進歩を確信していました。人間の精神形成における教育の力に深い信頼を寄せていたのです。感覚から正しい精神を導くような環境を用意すること、それが教育でした。ラ・シャロtte（1701-85）＜頁右上＞の『国民教育論』、ミラボー（1749-91）の『公教育論』もその系譜にあったといえます。『人間論』のエルヴェシウス（1715-71）も、徹底した公教育論者でした。『百科全書』の編者ディドロ（1713-84）は、この思想家群のなかでは、傑出したオルガナイザーでした。



ラ・シャロtte

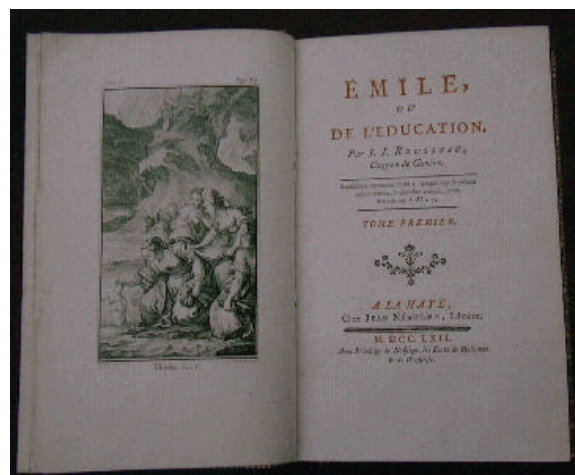
ルソー（1712-78）＜表紙右上＞は古代ギリシアのポリス共同体に公教育のモデルを求めてはいましたが、『エミール』＜頁右下＞は家庭教育を中心とする内容になっています。ルソーは、『エミール』で、一人の金持ちの孤児を育て上げていく過程を描いてみせましたが、ここでは、啓蒙主義者たちが克服すべきものと考えた「子ども期」をむしろ充実させることにより、理性をそなえた自立と連帯の人間、そしてやがて有徳な市民を用意できると確信していたのです。



フランス人権宣言



「ルソーと自然人」



『エミール』初版

[出展文献]

ディドロ編『百科全書、あるいは学問、技術、工芸の理性的辞典』1751-80年

D.Diderot (et.), *Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, 1751-80.

ルソー『エミール』初版 1762年

Jean-Jacques Rousseau, *Emile, ou de l' éducation*, 1.ed., 1762.

ラ・シャロツテ『国民教育論』 1763年

Louis-René de Caradeuc de La Chalotais, *Essais de l'éducation nationale*, 1763.

ラ・シャロツテ著／シュレツツァー訳『教授試論』 独語訳 1771年

Louis-René de Caradeuc de La Chalotais, L. Schlötzer (übersetzt), *Versuch über den Kinder- Unterricht, aus dem Französischen übersetzt*, 1771.

フィラシエ『教育史辞典』 1784年

M. Fillassier, *Dictionnaire historique d'éducation, Où, sans donner de préceptes, on se propose d'exercer & d'enrichir toutes les facultés de l'ame & de l'esprit, en substituant les exemples aux maximes, les faits aux raisonnemens, la pratique a la théorie*. Nouvelle édition, 1784.

ミラボー『公教育論』 1791年

Mirabeau, *Travail sur l'éducation publique*, 1791.

タレーラン・ペリゴール『公教育について』 1791年

Charles Maurice de Talleyrand-Perigord, *De l'instruction publique*, 1791.

Ⅲ(2).『エミール』初版とその反響

複雑な事情からフランスとオランダでほぼ同時に刊行された『エミール』の反響は大きく、フランスではすぐに発禁となったため、オランダ版が各地に流布した。イギリスでは翌年に翻訳がでたり、また隣国のドイツでも賞賛や批判がいきりみだれたが、カンペ(1746-1818)編集の『教育総点検』に収められた全訳とそれに付された註は、ドイツ汎愛派のルソー受容として、注目されている。

[出展文献]

ヌージェント訳『エミール』初版 1763年

Jean-Jacques Rousseau, *Emilius; or, An essay on education*, transl. Eng. by T.Nugent, vol.1-2, 1763.

フォルメイ『反エミール』初版 1763年

J. H. S. Formey, *Anti-Emile*, 1.ed., 1763.

フェーダー『新エミール』初版 1768年

J. G. H. Feder, *Der neue Emil oder von der Erziehung nach bewährten Grundsätzen*, 1.ed., 1768.

クラマー訳『エミール』(カンペ編『教育総点検』第12-14巻所収)

Jean-Jacques Rousseau, *Emil oder über Erziehung*, Cramer (übersetzt), in: Joachim Heinrich Campe (Hrsg.), *Allgemeine Revision des gesamten Schul- und Erziehungswesens von einer Gesellschaft praktischer Erzieher*, Bd.12-14.



フェーダー『新エミール』

IV. 教育学と家庭・学校・社会 ～ペスタロッチー・フィヒテ・フレーベル～

ペスタロッチー（1746-1827）＜表紙左下＞は『隠者の夕暮』で、神が与える親子の関係を再確認して、それを「生活が陶冶する」教育論の基本にすえました。それはやがて、新たに到来する産業社会を見すえた新しい学校教育の模索へとつながります。その結晶である主著『ゲルトルート教授法』では、直観を手掛かりに、生活に必要な知識の基本形式としての数・形・語の陶冶へと展開され、道徳・宗教教育まで展望されてゆきます。



ペスタロッチーと子どもたち

ペスタロッチーの教育実践とその思想は、ヨーロッパの各国に、様々なかたちで影響をもたらしました。ナポレオン戦争のときベルリンに在ったフィヒテ（1762-1814）＜頁左下＞は有名な『ドイツ国民に告ぐ』で、ペスタロッチーの教育実践にドイツ国民再生の手掛かりを求めています。



19 世紀当時の民衆学校

主著の『人間の教育』で、子どもに宿る神性を信じ、それを引き出すことに教育の本質をみていたフレーベル（1782-1852）＜表紙右下＞は、ペスタロッチーを最も忠実に深化させた後継者といえます。彼のカイルハウの学園の呼称「キンダー・ガーデン」は、今日では「幼稚園」を表す普通名詞になっていますし、「恩物」の名称で知られる遊具も有名です。

アメリカのオスウィゴウ経由のペスタロッチー主義は、明治初期の日本の教育にまで大きな影響を与えています。



フィヒテ



1810 年創設当時のベルリン大学

[出展文献]

ペスタロッチ『ゲルトルート児童教授法』初版 1801 年

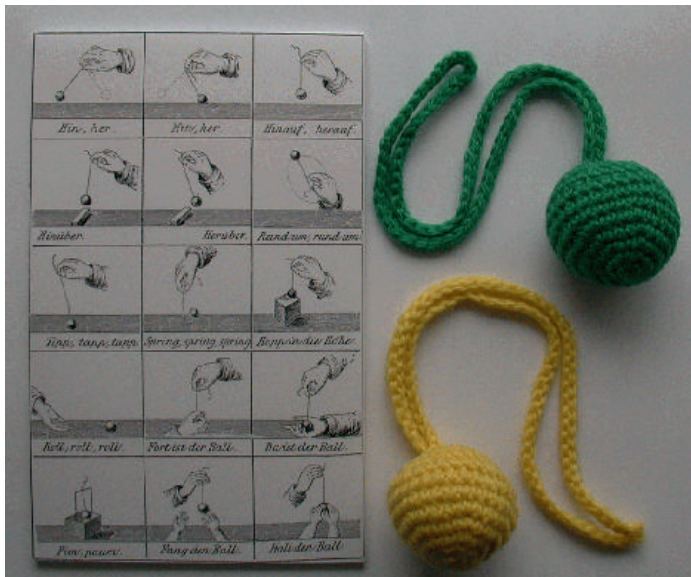
Johann Heinrich Pestalozzi, *Wie Gertrud ihre Kinder lehrt*, 1.Aufl., 1801.

フィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』初版 1808 年

Johann Gottlieb Fichte, *Reden an die deutsche Nation*, 1.Aufl., 1808.

フレーベル『人間の教育』初版 1826 年

Friedrich Wilhelm August Fröbel, *Die Menschenerziehung, die Erziehungs-, Unterrichts- und Lehrkunst, angestrebt in der allgemeinen deutschen Erziehungsanstalt zu Keilhau*, 1.Aufl., 1826.



フレーベルの「恩物」(第一恩物とその使用例)

IV(2). 講壇の教育学 ～ニーマイヤー、そしてヘルバルト～

ニーマイヤー（1754-1828）＜頁右上＞は、フランケの曾孫であり、啓蒙主義のもとで敬虔主義の精神を維持し、自らも曾祖父の設立した学院の経営にあたり、またハレ大学の神学教授でもあった。敬虔な家庭教育のもっている社会的な規定性を自覚し、実社会に有用な市民形成を目指す教育学を構想していた主著の『基本諸原理』は多くの版を重ね、その影響は、遠戚にあたるヘルバルト派のライン（1847-1927）がその校訂版を出版するなど、19 世紀の末にまで及んでいる。



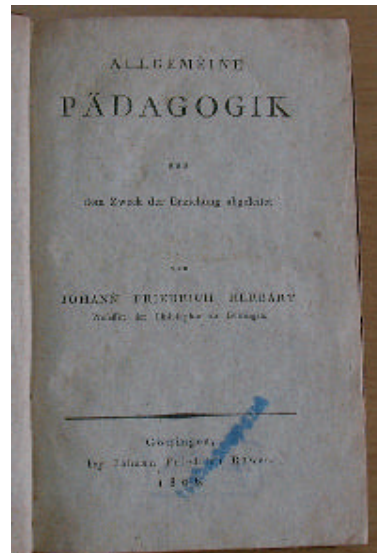
ニーマイヤー

ヘルバルト（1776-1841）＜頁左下＞は、このニーマイヤーに高い評価を与えていた。ヘルバルトは、ペスタロッチーへのかかわりから、知を内容とし媒介とする教授の営みにいかに道徳形成的な訓育の契機をみいだすか、そこに、『一般教育学』＜頁右下＞、さらに『教育学講義綱要』の関心を集中させていた。

啓蒙主義の国家的な要請によってトラップやカント（1724-1804）から始まり、ニーマイヤーやヘルバルトを経て、シュライエルマッハー（1768-1834）にいたる、人間論を基礎とした講壇教育学の系譜はここでいったん途絶え、19 世紀の末には国民教育のシステムを視野においた新たな講壇の教育学が登場することになる。



ヘルバルト



『一般教育学』初版

[出展文献]

ゲディケ『教育書全集』 1789 年

Friedrich Gedike, *Gesammelte Schulschriften*, 1789.

ニーマイヤー『教師義務論』初版 1786 年

August Hermann Niemeyer, *Entwurf der wesentlichen Pflichten christlicher Lehrer nach den verschiedenen Theilen ihres Amts*, 1.Aufl., 1786.

ニーマイヤー『基本諸原理』初版 1796 年

August Hermann Niemeyer, *Grundsätze der Erziehung und des Unterrichts*, 1.Aufl., 1796.

ニーマイヤー『公的学校と教育施設について』初版 1799 年

August Hermann Niemeyer, *Ueber Oeffentliche Schulen und Erziehungsanstalten*, 1.Aufl., 1799.

ペーリッツ『教育科学』 1806 年

K. H. L. Pölit, *Die Erziehungswissenschaft, aus dem Zwecke der Menschheit und des Staates praktisch dargestellt*, Bd.1 / 2, 1806.

ヘルバルト『ペスタロッチの直観のABCの理念』第2版 1804 年

Johann Friedrich Herbart, *Pestalozzi's Idee eines ABC der Anschauung*, 2.Aufl., 1804.

ヘルバルト『一般教育学』初版 1806 年

Johann Friedrich Herbart, *Allgemeine Pädagogik, aus dem Zweck der Erziehung abgeleitet*, 1.Aufl., 1806.

ヘルバルト『教育学講義綱要』第2版 1841 年

Johann Friedrich Herbart, *Umriss pädagogischer Vorlesungen*, 2.Aufl., 1841.

<パネル画像出典>

- G.Arnhardt / G.-B.Reinert (Hrsg.), Jan Amos Comenius. Über sich und die Erneuerung von Wissenschaft, Erziehung und christlicher Lebensordnung, Bd.1, 1997.
- P.Raabe, *Das Hallesche Waisenhaus*, 1995
- T.Müller / G.Theato, *Die Franckeschen Stiftungen mit ihrer Kunst- und Naturalienkammer*, 1996.
- J.B.Basedow, Elementarwerk mit den Kupfertafeln Chodowieckis u.a. Kritische Bearbeitung in drei Bänden, T.Fritzsche (Hrsg.), 1909(1972).
- G.Mariller, *J.J.Rousseau ou La Pensee Verte*, 1978.
- F.E.T.P.Richard (Hrsg.), *Emile ou de l'education*, 1964.
- H.Schmitt (Hrsg.), *Visionäre Lebensklugheit: Joachim Heinrich Campe in seiner Zeit (1746-1818)*, 1996.
- H.Schmitt (Hrsg.), *Briefe von und an Joachim Heinrich Campe*, 1996.
- Pestalozzianum und der Zentralbibliothek in Zuerich, *Pestalozzi und Seine Zeit im Bilde*, 1928.
- J. Prufer, *Friedrich Fröbel. Sein Leben und Schaffen*, 1927.
- フレーベル著『教育の弁明 フレーベル自叙伝』岡元藤則訳, 玉川大学出版部, 1976(1971)
- R.Alt, *Bilderatlas zur Schul und Erziehungs Geschichte*, 1960.
- I.Weber-Kellermann, *Die Kindheit*, 1979.
- T.Brueggemann / H.-H.Ewers, *Handbuch zur Kinder-und Jugendliteratur Von 1750 bis 1800*, 1982.
- H.Schiffler / R.Winkeler, *Tausend Jahre Schule Eine Kulturgeschichte des Lernens in Bildern*, 1985.
- H. Schiffler / R. Winkeler, *Bilderwelten der Erziehung: die Schule im Bild des 19.Jahrhundert*, 1991.
- C.Stoelzl (Hrsg.), *Deutsche Geschichte in Bildern*, 1997.

お わ り に

この特別展示にあたっては、共催者の附属図書館と教育学系はもとより、開学 25 周年委員会、さらには出展にご協力いただいた関係各位に、まず感謝しなくてはなりません。とりわけ、総務担当副学長桑原敏明、附属図書館長斎藤武生、教育学系長山口満の諸教授からは、格別のご協力をいただきました。それに広島大学副学長小笠原道雄教授からは、長田新博士旧蔵の『人間の教育』初版の貸出を受け、また記念講演をお引き受けいただくなど、感謝のことばもみつからないほどです。そして金子茂九州大学名誉教授（中央大学教授）、松島鈞筑波大学名誉教授（聖徳大学副学長）からは、出展文献の選定や出展そのものについても多大のお力添えをいただきました。

この企画は、もともと、1 年ほどまえに附属図書館の館報『つくばね』に載せてもらった「宝ものがやってきた」と題する駄文を覚えておられた金子教授から、「いい機会だから、このさい出したら」というありがたい(?) 挑発に乗ってしまったことが発端でした。金子教授のアドバイスを受け、日本ペスタロッcher・フレーベル学会の大会を控えた道徳教育の福田弘教授、教育史学会の大会を受け入れた日本教育史の大戸安弘教授と外国教育史担当の私との共同作業として、関係の助手や大学院生、それに修了して立派な大学スタッフとなっているかたがたの献身的な労働奉仕を受けながら、それなりの体裁を整えることができました。山内規嗣教育学系助手（10 月より広島大学講師）、谷塚光典教育学系準研究員、それに大学院教育学研究科の内藤直美、山田恵吾、李明實、寺田博行、細戸一佳、武田安史の諸君です。また、三輪貴美枝滋賀大学講師（3 月まで教育学系助手）には、画像資料の探索・提供でもご協力いただきました。

そして、最後に、多忙な業務の合間にいただいた附属図書館の事務部のかたがた、森茜、湯浅富士夫の旧新図書館部長、内藤英雄情報管理課長、佐藤博同課長補佐、福島裕子図書館公開係長、大澤類里佐同係員、鳥屋部順情報サービス課長、山崎好子同課長補佐、小西和信情報システム課長、栗山正光同課長補佐、熊谷隆古典資料係長、高島恵美子同係員、岡部幸祐システム管理係長のご協力にも感謝しています。

（教育学系教授 山内 芳文）

